

第29回 IGC の事務局

本 座 栄 一¹⁾

はじめに

1988年12月に第29回万国地質学会議(IGC)の組織委員会が準備委員会を引き継いで開設され, その事務局を地質調査所で引き受けてくれないかとの要請があり, 時の井上英二所長が地質調査所の研究者に協力を要請すると同時に所議にその設置を諮った。

事務局に, 私がチーフ, 有田正史, 遠藤祐二, 小玉喜三郎の3氏がスタッフとなる要請をうけたが, 4人で事務局の仕事を行うことになったのは, 数ヶ月にわたる討議に揺れた後であった。

地質調査所の研究者の中には学会の役職に就き, その中心となって活動している多くの人々がいるが, IGCの事務局となると, そのスケールの大きさから話は別のものとなる。これは大学等の研究者にとっても同様である。IGCの各小委員会を担当した大学の地質学教室は, 少ないスタッフの中で, 研究活動も含めて大いなる犠牲を払って会議の準備に取り組んだ。

ここに1989年6月に第29回 IGC 事務局が地質調査所に開設されてから, 現在までの事務局の仕事を紹介し, もって今後の国際会議開催の参考にでもなれば幸甚である。なお, 事務局は組織委員会の解散を待って, 1993年9月に閉じる予定である。

初期(1989年)の事務局

本会議の開催まで3年有余の期間しかないことから準備体制のタイムスケールを作り, 佐藤正組織委員長等と相談しながら組織作りから開始した。同時に事務局の仕事を上記3氏と討議し, 当面以下の仕事を行うことにした。

1. IGC 関連の各種委員会の連絡・調整とその一

部の運営

2. 国内外の連絡及びその窓口
3. サーキュラーの編集と発行
4. ニュースレターの発行
5. 事務局の会計業務

以上の仕事を行うために地質調査所に事務局室の設置をお願いし, そこに必要な最小限のレンタル備品, 消耗品を備える必要があった。

さて, 最初に困ったのが事務局の運営費である。地質調査所の所長, 元所長, 組織委員会幹部の方々から浄金をお借りして運営することになった。また必然的に地質調査所に有形, 無形のお願いをすることにもなった。

ここに準備に関係された多くの方々に厚く御礼申し上げます。

1989年7月に米国ワシントンで第28回 IGC が開催された。その折に地質調査所が出展した科学展示ブースの一部を借りて第29回 IGC ブースを設け, 西村進氏と私とでアンケート用紙と京都市からいただいた観光案内を配ったりして京都への参加を呼びかけた。次回 IGC が日本で開催されることから多くの日本の研究者がワシントンの IGC に参加したが, そのなかに国立京都国際会館のスタッフの方も参加して IGC の実際を調べられた。

私も会期前にワシントンに行き, B. Hanshaw 事務総長に付き, 本会議の運営を見聞させてもらった。たまたま別の会議で本会議前の3月にワシントンを訪れた時に1日レストンの USGS を訪れ, 準備状況の話を伺っていたが, 本会議の実際を知るためになるべく早期にワシントン入りするように要請されていた。本会議前日の組織委員会にも出席させていただき, 多くのことを見聞させていただいた。これは日本での開催準備に大いに役立った。

ワシントンでの IGC で日本開催が正式に決定し,

1) 地質調査所 燃料資源部; 第29回 IGC 事務局長

キーワード: IGC, 事務局

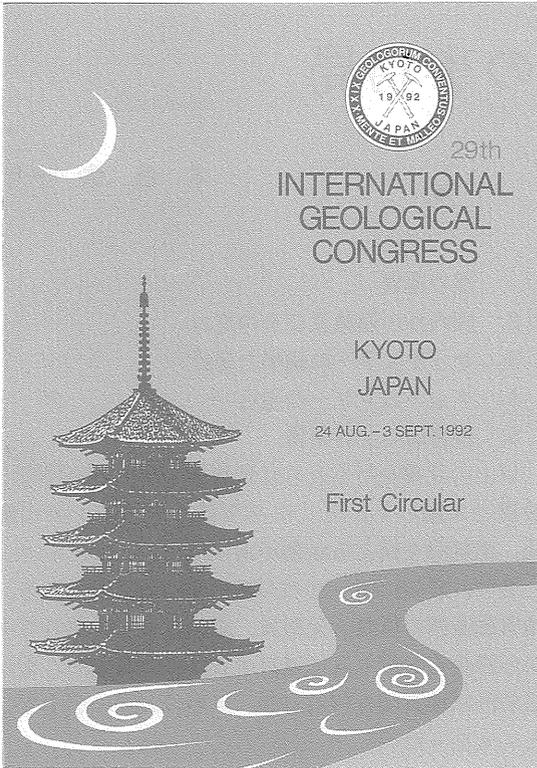


写真1 ファースト・サーキュラーの表紙。有田正史・斎藤一朗氏製作。過去のIGCではサーキュラーの表紙は3部とも同一であったが、今回はじめて変えた。

それ以降活発な準備活動が始まった。事務局ではIGCの国内組織の運営規約原案を作成，地学関係，学協会へ協賛を呼びかけ，ニュースレター掲載の依頼等を行った。少ない事務局スタッフで実施するため外廻りは佐藤委員長と私とで行なった。

会場となる国際会館，コンベンション会社，旅行会社等の受け持ち分担の相談，組織委員会の準備，募金関係の準備会と会議が続いたが，10月初旬に地質調査所に事務局室が開設され，銀行口座も開かれ，佐藤正委員長の要請に答えて各小委員会の委員長等も徐々に引き受けていただいた。同時に学術会議をはじめ主だった学会への主催の依頼，協賛団体の依頼も開始された。1989年12月の組織委員会では石原舜三所長(当時)が事務総長となることが決定し，事務局の運営体制も少しずつ固まっていた。

事務局の仕事の進捗状況については，関係学会に定期的にニュースを流すほか，「地質ニュース」誌上に「IGC事務局ニュース」の欄を設けて，ほぼ

毎月記事を掲載し，広報につとめた。これは主に小玉喜三郎氏，後に佐藤興平氏が担当した。

サーキュラーの発行

サーキュラーには会議の概要が盛り込まれることから，その原稿には各小委員会での決定事項が記載されねばならない。短期間にこれらを準備するために事務局のみならず各小委員会とも大変な苦勞をした。サーキュラーの発行に関して石油技術協会誌(vol. 58, 1993)にも紹介している。かなりの部分が重複するが，ここでも一応紹介してみよう。

1) ファースト・サーキュラー

1989年10月にファースト・サーキュラーの発行準備にとりかかり，事務局は多忙をきわめたが，科学プログラム，巡検といった小委員会でも，ファースト・サーキュラーにそれぞれの基本的骨格と最大限予定される事項を盛り込まねばならず，各小委員会の忙しい仕事の始まりでもあった。1990年1月の第5回組織委員会で原稿の承認を受け，印刷に付した。なお，英文のチェックは以降のサーキュラーも含めて，全て事務局のジェフ・ヘディンクエスト氏によってなされた。

事務局の運営費用の他にファースト・サーキュラーの発行・発送の経費が必要であった。国立京都国際会館が貸出の限度額を超える500万円を貸付けて下さった。その他に地質学会の有志の拠金，準備委員会からの引継等の基金があり，これらが印刷，発送費となった。

4万部のファースト・サーキュラーを印刷，国内版として1万2千部には日本語の要約もつけた。1990年4月～5月にこれらを全世界に発送したが，発送先のリストは地質調査所の文献交換リストとUSGS発行の世界の地質関係機関リストに加えて第28回IGC参加者リストを第28回IGC事務総長のB. Hanshaw氏からもらいうけて作り上げた。

サーキュラーの発送が済み，後は同封されたアンケートの回答待ちである。ファースト・サーキュラーのアンケートの締切が7月15日までと，短期間であったが，合計4,561通の返事が寄せられた。締切り後も返事が寄せられたが，これはセカンド・サーキュラー送付の要請と解される。過去のIGCでは，このアンケートの返事の8割位の人数が総参

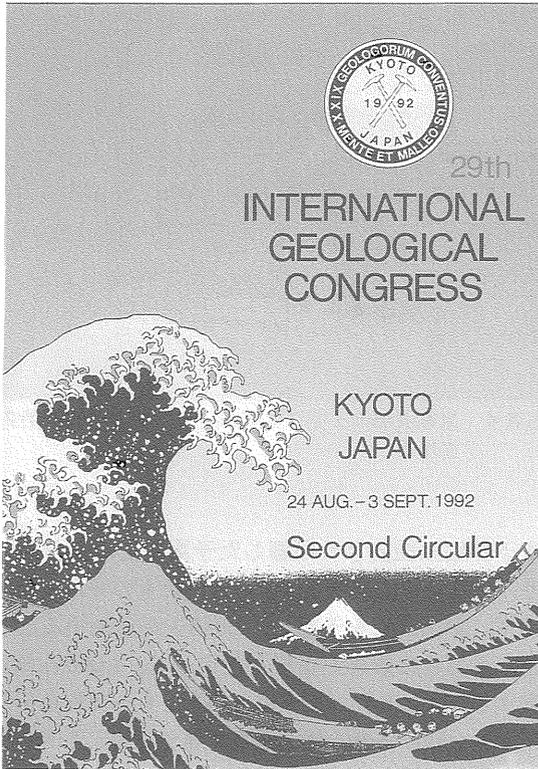


写真2 セカンド・サーキュラーの表紙。石原舜三氏製作。

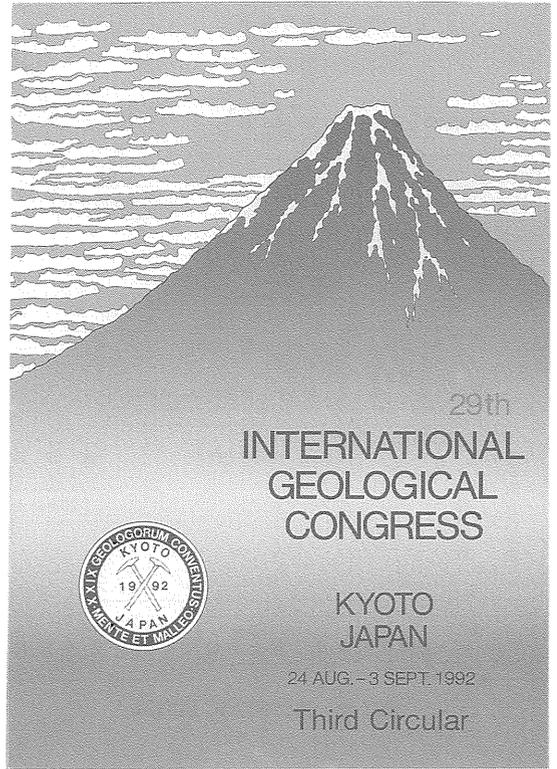


写真3 サード・サーキュラーの表紙。岡部賢二・石原舜三氏製作。

加者になるとの統計数値があるが、その割合では3,600名位の参加となるわけである。しかしながら、短期間であったことと、配布期間に限度があったことから、それ以上の参加が見込まれ、科学プログラムとの関連からも、事務局の判断としては、3,700-4,700人、最も大きな可能性は、4,200人とした。これは実際の参加者とはほぼ同じ結果となった。

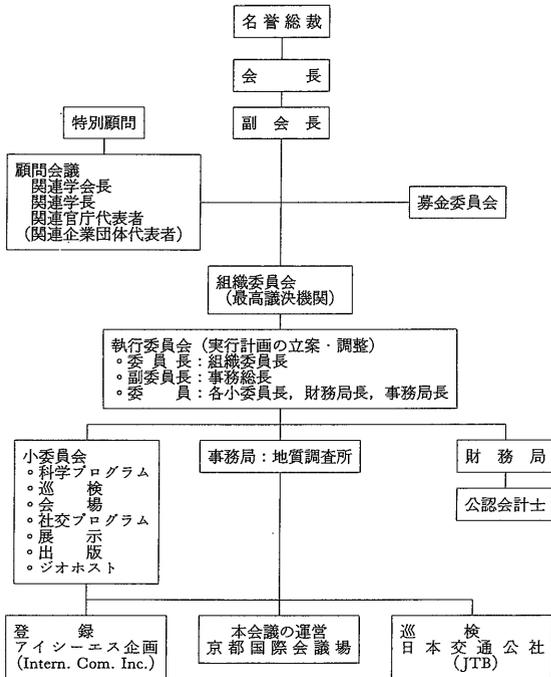
2) セカンド・サーキュラーとサード・サーキュラー

1990年も後半になるとアンケート結果に基づいたセカンド・サーキュラーの編集準備である。ここには最終案が盛り込まれ、これを基にして各参加者が申し込む。次に発行するサード・サーキュラーは、セカンド・サーキュラーの補足とシンポジウムの日程を盛り込み、会議直前に発送される。最終案の作成に最も忙しい時期となった。事務局でも最終案の作成と同時に各小委員会の最終案の調整とその手伝いといった作業が続いた。1990年末までに最終案の原案が作られ、1991年々頭の組織委員会に

それが提案された。科学プログラムは久城育夫委員長が原案を持って2月初めのIGCP年次総会に出席し、最後の調整を待って最終案が2月下旬につくられた。なお、佐藤正組織委員長は原案を1月下旬のIUGS執行委員会で提示し、了解を得ている。

1990年3月にセカンド・サーキュラーを印刷し、4月に発送を開始した。一部学術会議に国外への発送を頼み、西ヨーロッパと北米大陸はそれぞれステータスUKとJTBインターナショナルへ日本航空から無料で送ってもらい、そこから郵送していただいた。そろそろ資金も底をつき、印刷費の支払いはお願いして半年待ってもらうことにした。

セカンド・サーキュラーは2万部印刷され、ファースト・サーキュラーのアンケートの回答者、コンビナー、講演依頼者、各国の主だった機関等に、総数1万8千部配布されている。セカンド・サーキュラーには会議参加、講演、巡検、宿泊、ジオホスト等の申し込み用紙が入っていた。



第1図 第29回 IGC 組織図



写真4 京都會場のインフォメーションデスクでの竹内圭史氏。

る予算案は表向きの印刷した予算案とは幾分異なり、一項目毎に厳密な討議の入ったものであった。まず、参加人数を予想し、4,000人が参加すると考え、予算案は最悪の事態を想定して、3,000人で立案することにした。事務局といえども一部資金を使用する立場にあり、例えば事務局で立案したサーキュラー等の印刷費にも厳しいチェックが入った。

1990年11月に第28回 IGC ワシントンを開催した USGS の B. Hanshaw 事務総長が筑波と京都を訪問し、印刷したばかりの General Proceedings を持ってこられた。これを参考にして IGC 開催のノウハウを伺い、大いに参考にさせていただいた。

1991年前半はセンカド・サーキュラーの編集と印刷、発送といった作業が主体となったが、それに盛り込む種々の懸案事項の調整、決定のための作業が続いた。

1991年後半はセカンド・サーキュラーに盛り込まれた参加者登録、アブストラクトの締切り等あたり、連日返送される申込み書の整理に追われた。また、石原事務総長による Episode 原稿の依頼、学術会議組織委員会の開催、関連省庁への後援依頼等がなされた。12月に入ると外務省、法務省での受入体制に関する事情聴取を行い、いよいよ最終局面を向かえようとしていた。

事務局と各小委員会

IGC は通常の国際会議に比べてはるかに規模が大きく、多人数が参加することから、その準備と運

1992年4月にサード・サーキュラーが1万2千部印刷され、5月に参加申し込み者と主だった研究機関に配布された。

準備の中間段階(1990年-1991年)の事務局

1990年前半はファースト・サーキュラーの発行と郵送が主体となったが、その間に JTB, JAL, ICS といったエージェントとの打ち合わせ、日本地質学会年次大会での IGC シンポジウム開催、地学関係学協会への協賛の要請、大蔵省、東京都への協力要請といった作業が続いた。また海外の国際学会を含めた各学会の年会でのサーキュラーの配布と参加要請も行われた。

1990年後半になると募金関係等の関連もあり、詳細な予算案の作成に入った。IGC では懸案事項の最終決定権は組織委員会にある(第1図)。組織委員会へ提出する案件は各小委員会委員長と執行部で構成される執行委員会で審議される。しかしながら小委員会の委員長方も予算を執行する立場にあり、対立する利害には、その調整が必要であった。このような事情から調整は組織委員長をはじめとする執行幹部の仕事であった。その執行幹部で作成す

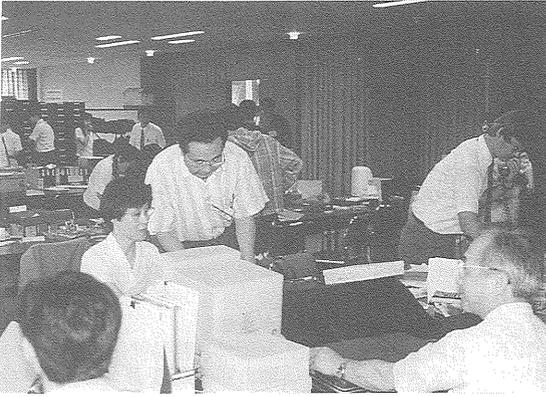


写真5 京都会場の事務局室 1. 左から佐藤正組織委員長夫妻と仕事中の宇都浩三氏, それを見ている本座.



写真7 京都会場の事務局室 3. 左から仕事にくたびれた有田正史, 倉沢一, 宇都浩三の諸氏.

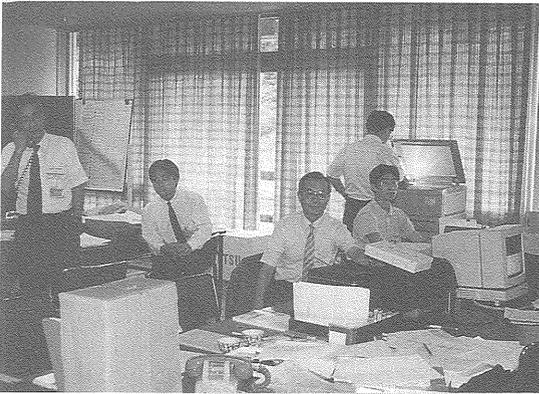


写真6 京都会場の事務局室 2. 左から西村進会場委員長, 学術会議田中英雄氏, 本座, 宮地真典氏.



写真8 事務局室 4. てきぱき仕事をしている鈴木祐一郎氏と佐藤洋子氏.

営には多くの委員会を設けて、分担して作業にあたる必要がある。今回のIGCでは、これらを小委員会と呼び組織委員会のもとに組織されたが、これら小委員会にも多くの人々が参加していた。例えば科学プログラムと巡検の両小委員会にはそれぞれ数100人の方々が参加している。

事務局が国内外の連絡の窓口となったため、各小委員会での討議になるべく参加し、そこでの決定事項、懸案事項の相互の連絡と調整を行った。また、一部の小委員会の仕事を事務局で分担した。

総計6,000通に近いアブストラクトが寄せられたが、それらのコピーをプログラム委員会に送り、原紙は印刷用に事務局に置かれた。アブストラクトの一部は事務局でタイプの打ち直しもされた。寄稿者の希望セッションとコンビナー、プログラム委員会

によるセッションの決定、参加者への確認証の送付、それらのリスト作りといった作業が科学プログラム小委員会と分担して行われた。これらの分担作業は矢島淳吉、竹内圭史両氏を中心に行われ、お2人とも著者名と題名を聞いただけで、いつごろこのセッションに寄せられたのか記憶している位、アブストラクトに精通するようになった。

巡検コースの内、JTBに旅行の手配を頼んでいたコースも多数あり、JTBの窓口が東京にあったため巡検小委員会とJTBの間の連絡・調整も必要であった。エージェントが入ると幾分割高になることから一部をコースリーダーが手配し、一部をJTBにお願いするような希望も出されたりした。

IGCの事務局とは幾分離れるが、巡検小委員会の諏訪兼位委員長から地質調査所に巡検ガイドブックの編集・発行の要請があり、小川克郎所長が、そ

第 1 表 第29回 IGC 組織委員会と事務局関連事項のタイムテーブル

1988年(昭和63年)	9月	記念切手発行決定		
12月	10月	ジオホスト申込締め切り (10月末日まで延期) 関連省庁へ講演依頼書発送		
1989年(平成元年)		展示委員会 ポスター完成		
3月		第4回執行委員会 小玉喜三郎事務局退任, 佐藤興平・多恵朝子両氏事務局就任		
		第28回 IGC 事務総長から本座事情聴取		
4月		地質調査所における事務局設置の討議		
6月		第2回組織委員会 地質調査所での事務局開設決定 本座栄一・有田正史・遠藤祐二・ 小玉喜三郎事務局就任		
7月	11月	ジオホスト選定委員会 ジオホスト第一次採否通知		
8月	12月	竹内圭史・小笠原正継両氏事務局就任 アブストラクト申込締め切延期(1月末日) ジオホスト候補者決定と通知 外務省・法務省への事情聴取開始		
9月		第3回組織委員会		
10月	1992年(平成4年)	1月	皇太子殿下下名誉総裁就任 アブストラクト申込締め切り IUGS 執行委員会(マルセイユ)佐藤委員長出席	
		2月	アブストラクト採否決定と通知 巡検コース最終案決定	
11月		3月	事前登録申込締め切り	
12月		4月	内藤一樹・宇都浩三・奥村晃史・斎藤真・ 鈴木祐一郎・佃英吉・宮地良典・ 富島俊子・久保紀子・小嶋和子各氏 事務局就任 記念切手デザイン検討(郵政省)	
1990年(平成2年)			第8回組織委員会	
1月		4月	サード・サーキュラー印刷	
		5月	発表セッション(含 O, P)と日程通知	
2月		6月	第5回執行委員会 記念切手デザイン決定 サード・サーキュラー発送 プログラム・アブストラクト集・ 巡検ガイドブック印刷	
		7月	講演日程の最終通知 第9回組織委員会 記念切手発行告示(郵政省) 登録者名簿・宿泊者リスト印刷 参加者用配付物納品	
3月			第1回運営委員会 (これ以降執行委員会に引き継ぎ)	
		8月	プログラム, アブストラクト集, 巡検ガイドブック納品 巡検開始	
12月			配付物京都搬入・詰め込み作業 (同志社大学) 登録開始(KICH) 第10回組織委員会 学術会議第2回組織委員会	
1990年(平成2年)			8-9月	本会議・巡検
1月			9月	お礼まいり開始
			10月	第6回執行委員会
2月			1993年(平成5年)	
			3月	第7回執行委員会 第11回組織委員会 学術会議第3回組織委員会
3月			4月	プロシーディング印刷
4月			6月	プロシーディング発送
5-6月				
7月				
8月				
9月				
10月				
11月				
12月				
1991年(平成3年)				
1月				
2月				
4月				
5月				
6月				
7月				
8月				

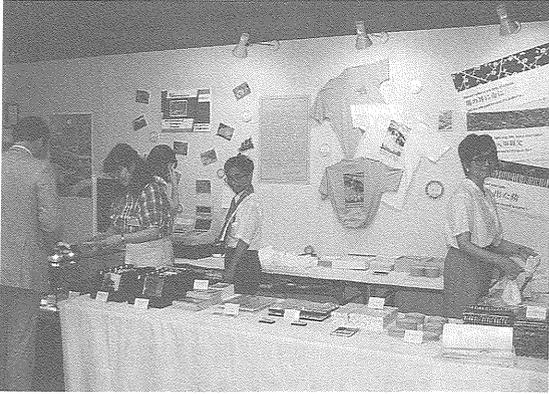


写真9 展示ブースで、おみやげ品を売る左から多恵朝子、富島俊子、有田正史、矢島淳吉氏夫人の皆さん。

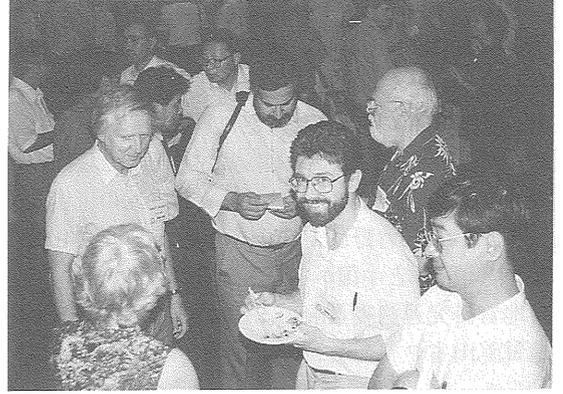


写真11 お別れパーティーでのジェフ・ヘディンクレスト氏。



写真10 地質調査所展示ブースの一部。



写真12 ロシア代表の N. Laverov 氏から感謝の記念クリスタルを送られる本座。右端は N. Vogdanov 氏。

れを受けて地質調査所内に加藤禎一氏を中心に数名のスタッフと事務局勤務の秘書から成る巡検ガイドブック編集グループが発足した。ここで全6巻のガイドブックが編集された。

出版小委員会の委員長に地質調査所の鈴木尉元資料センター長があたったことから事務局と共同で編集・出版を担当し、ここに奥村晃史、鈴木祐一郎両氏が従事した。奥村氏はプログラムボリュウムの講演リスト・インデックス作成から参加者リストの作成、これらをもとにした会場での受付体制の検討を会場小委員会の鳥居氏と行った。

科学展示会については委員長が東京と京都に分かれていたことから事務局が窓口となり連絡・調整にあたり、展示依頼書の作成、印刷、公的機関への展示要請等を事務局で分担した。

本会議開催中に催されるサイエンス・シアターを

事務局が分担し、国内外の映写希望の受け付け、フィルム借出しのお願い等を高橋雅紀氏が担当した。

これらの仕事は押し寄せる雑多な仕事と平行して行われたものが多い。事務局スタッフとして多くの研究者が従事したが、研究者としても有能な方々が中心となって働いた。それぞれ普段の研究とそれに係わる仕事で忙しい思いをしている方々であった。それでも全体としては人手不足であったが、皆その中を頑張って仕事をこなしてきた。

本会議直前(1992年)の事務局

本会議が近づくにつれて全ての準備した事項が集約され、最も忙しい時期となった。なかでも国外の参加者の来日の手続き、特に旧共産国からの参加者のビザの取得は、人数が多いこともあり、多大の労

力を伴った。手続きとして最初に参加者からの参加要望に基づき、招請状、理由書、身元保証書、日程表を送り、当人が現地大使館に提出し、それが外務省から事務局に照合され、逆の手順をたどって当人にビザがおりるわけである。参加希望者と何回かのやりとりが必要であり、これらを事務局の玉生茂子・宇都浩三・竹野直人3氏を中心として成し遂げた。旧ソ連邦と中国からの参加者はそれぞれ旧ソ連邦地質研究連絡委員会の Ruslan Vorkov 氏と中国地質鉱山省の Wang Xionglin 氏が窓口となっていた。大いに助かった。ここに厚く御礼申し上げる。R. Volkov 氏は本会議参加時に事務局にこられ、玉生茂子氏と私の写真を取り、毎日のように Telex で連絡し、忙しい思いをさせた張本人を研究所の3人の秘書嬢に紹介せねばならないと言っていた。

そのほかの案件も徐々に押し寄せ、1日に数10通に達する郵便物、ファックスの処理に追われた。参加する研究者の確認と京都でのJTBによる宿舎の連絡、VIPの日程の連絡、出迎え体制、国外のVIPの方々には、さらに加えて搭乗便の連絡、参加者へ配布する印刷物と配布物の納品と京都への配送の手続き等が開会直前にピークに達した。ここで最も威力を発揮したのがファックスであった。ファックス無しではこれらの連絡等はとうてい成し得なかったと感じている。国外VIPの搭乗便は日本航空(全)と全日空(全)にビジネスクラスの半額を負担していただいた。

各小委員会の活動も開会直前にピークに達し、委員長、幹事をはじめとするスタッフの方々にとっても、大変な時期であった。京都の会場では開会の前週に、同志社大学で筑波から到着した配布物の詰めこみ込み作業が始まった。京都の会場小委員会には関西近縁の大学の多くの教官がスタッフとなり、会期前後を含めたアルバイトの学生等は関西のみならず、日本中から集まっていた。その総数は約220人に達すると聞いている。会議前巡検も始まり、その他の準備も最終局面を迎えた。

会議参加者への配布物

会議参加者への配布物には、会議に直接必要なも

のとのおみやげがあるが、参加料が高いことから、ある程度の費用をかける必要があった。会議のプログラム、アブストラクトは必需品であるが、その他に石原事務総長の努力で編さんされたIUGS発行のEpisodeの日本の地質の特集号、募金協力者名簿、観光案内、文鎮、扇子、手拭い、ステッカー、ルーペ、露頭スケール、ノート、ボールペン、これらを入れるバッグが配布された。また、200万分の1日本地質図、地質絵葉書が地質調査所から寄贈され、配布された。手ぬぐいには「馬の耳に念仏」、「身から出た錆(さび)」、「地震雷火事親父」のことわざに英語の訳を添えてあった。浦辺徹郎チームの苦心の作である。

その他に科学展示会場のIGCブースでは記念切手セット、テレホンカード、腕時計、計算機、タイ止め、タイピン、Tシャツ等が、一部配布物も含めて販売された。

これらの配布物、販売品は1年前から主として石原事務総長により準備され、その中でTシャツには雲仙の噴火がデザインされ、その売上は噴火被災者への義援金とされた。

あとがき

本会議開催までの3年以上の事務局の仕事について述べたが、地質調査所の大多数の方々の支援のもとに、多くの方々が事務局スタッフとして働いた。膨大な仕事をこなしただけでなく、これらスタッフの努力の結果と考えている。中にはおしかりを受けるようなこともあったと思うが、この場をお借りして御容赦をお願いしたい。

準備にあたった組織委員会以下多くのスタッフの方々、支援していただいた国内学協会、企業、団体、官公庁の関係者に厚く御礼申し上げます。特に全省をあげて支援していただいた通商産業省には深甚の謝意を呈します。

HONZA Eiichi (1993): Headquarters office of the 29th IGC
